

# パラグアイの不思議な魅力

坂野 鉄也（経済学部講師）

パラグアイという呼称を聞いて、それが南米にある国であるということまでわかったとして、その位置まで正確に示すことができる人は、日本にどのくらいいるであろうか。わたしが南米のパラグアイを研究していますというと、たいていウルグアイとまちがえられる。それほど知られていない地域をわたしは研究している。しかも、歴史的にアプローチしている。南米の歴史と言えば一般的に、「インカ帝国」を想起されるであろうが、パラグアイにはそのような華やかな歴史はない。スペインによって植民地とされる以前、大規模な国家をなすことはなく、亜熱帯のためほとんど考古学遺物が残らないこの土地には、観光の目玉になるような遺跡はないのである。パラグアイにある世界的に有名なものと言えば、世界一の幅を有するイグアスの滝であるが、ブラジル、アルゼンチンという大国とも国境を接する場所にある滝は、ブラジル、アルゼンチン側から観光することはできても、パラグアイ側から近づくことさえできない。パラグアイには何も無い、逆に言えば、何も無いという良さしかない。

しかし、人類学を含む社会科学や歴史学という視点から見れば、これほど興味深い場所はそうそう見つからないであろう。今から500年ほど前にスペインの植民地になったにもかかわらず、今も国民の4分の3は先住民グアラニに由来する言語、グアラニ語を話す。もちろんその大半は、スペイン語やそのほかの言語とのバイリンガルであるが、多くの国民が日常的に用いているのはグアラニ語なのである。近隣諸国に目を向けてみれば、「インカ」という歴史を持つペルーでも、先住民語が国民の生活言語であったり、公用語であったりすることはない。また多くの国民は、グアラニが儀礼にもちいたお茶、マテ茶を常用する。現地で「テルモ（サーモスという会社名の現地音が一般名詞化された呼称）」と呼ばれる水筒を含めた喫茶セットを持ち歩き、職場でも道ばたや公園でも年がら年中、お茶を飲む。マテ茶の回し飲みがパラグアイ人の社交である。農牧業以外には産業はほとんどなく、



織物業といった輸入代替工業のはしりとなるような業種さえ発展していないが、人々は何の悩みもないかのように、自宅の前に椅子をだし、のんびりと過ごしている。もちろん、人々の生活に余裕があるわけではない、国も国民も世界的に見れば貧しいというのが現実である。しかし、パラグアイを訪れた人間は、「何もなさ」とともにその平穏さに目を見張るのである。

ヨーロッパを基点に発達した学問にはどうも偏りがある。自然環境が厳しい場所で生きてきた人間が考えたものは、今より良い状態を想定し、それに向けて改良を加えていくことこそが絶対善という発想から脱却できないようである。しかし、熱帯や亜熱帯の森の中で、最低限の食糧には困らないという環境に生きてきた人々は、改良や改善ということを常に求める思想にはなじめない。彼らとて、苦しみや悩みがないわけではないが、発展に向かって邁進することのみが良いこととは考えない。「しんどいな」という思いを素直に表すことができる人々である。

私が目指しているのは、「学問の相対化」というと少し恰好良すぎるのかもしれないが、亜熱帯に営々と生きてきた人々の来し方を探りながら、これまであまり目を向けられることのなかった人々の生き様を描くということである。みなが前ばかり向いて歩いているわけではない。しんどくてしゃがんでいる人もいれば、立ち止まり横を向いておもしろいものを見つけている人もいる。そうした「現実」を示すことが、人間を対象とする学問の一つの有り様であろう。